

Special Essay

故郷 子供のころの記憶

大学病院リハビリテーション部
志波 直人

学校からの帰り、急に激しい雨が降り出した。大粒の雨は周りの音を消しながら跳ね上がり、前を歩く人たちの足元を白く煙らせた。雨が止んで静寂が戻ると再び強い陽が射し、湿気を含んだ雨の臭いが地面から上がってきた。父の仕事で5歳から10歳まで土佐中村で過ごしたが、このようなありふれた夏の出来事を思い出す。

中村は四万十川河口から10km程上流にあり、過去に遡ると今から500年以上前、応仁の乱を避けた前関白の一条教房が中村に下向し、京都に模した街づくりを行った由緒正しい歴史がある。京都に比べると規模はずっと小さいが、碁盤の目の区画は残り、当時の京都に所縁のあるいくつかの行事が、今でも地元の人たちによって引き継がれている。

今年6月末、中村病院副院長で、当時弟の同級生だった陣内先生から講演の機会を頂き、再び中村を訪れた。40年前には無かった土佐くろしお鉄道中村駅に降りた。何人かの知人から昔と変わらぬ笑顔で迎えていただいた。子供のころよりも街は随分小さく感じられ、活気のあった商店街は、閉じている所が目立った。1学年10クラスあった中村小学校は2クラスとなり、街から子供の笑い声がめっきり聞こえなくなったとお聞きした。中村市が四万十市になったことは残念だが、四万十川の知名度から考えると仕方の無いことだろう。

幡多地区医師会主催の講演を終え、翌朝、四万十川に架かる赤鉄橋を歩いた。橋の中央から濃い緑色の山々の間を縫って流れてくる川を見たとき、探していたものを見つけたような気持ちになった。中村を一望できる為松公園に向かうと、当時よりもさらに鬱蒼としていたが、昨日までの雨は上がり青空が広がっていた。強い日差しで地面から上がってくる臭いや湿気が懐かしく感じられた。弾んだ息であのころと同じ空気を吸い込むと、さまざまな記憶が蘇ってきた。休日の朝は、父と兄弟でよくここへ登り、家では母が朝食の準備をして待っていた。どのように私たちがここで暮らしていたのか良くわかる気がするの、自分が当時の両親の歳を追い越したためだろう。

眼下には、新築されて立派になった父が勤めていた病院と、すっかり古くなった当時のわが家が見えた。変わって残念なところもあるが、中村の良さはここに生きる人々によって守られている。少年時代の僅か5年間に過ぎないが、懐かしい街並みや山、川は、善き人たちと共に、記憶の中にしっかりと刻まれている。